

病を治す事の出来るものではない前に記したる如く空氣や水が本病を治すべき譯のものではないと同じ事である

以上論ずる所に依り本病に關する現今の學說并に療法の誤つて居る所を指摘し且つ結核菌は新生する事があるといふ事の初めて稱道したる新説の概要を説明したのである因て是より以下に於て本病は如何して治療すべきものであるかといふ事を述べようと思ふのである

第一章に於て述たる治療上の原則并に第二章中に掲げたる完全治療法の定義に従ひ腦髓を基礎とし心理と生理との方法を調和して治療し各部の活動を善良ならしむれば本病と雖も治癒せらるべき道理である即ち肺臟心臓も腦髓に於て支配して居るものであるから腦髓を基とし心理生理の方法を以て是等諸臟の活動を善良ならしむれば呼吸作用并に血液の循環も善くなり隨て適當に血液も酸化し充血炎症も消散し終に微菌も自滅せざるを得ざる様になつて來る又温熱も腦に於て司ごつて居るから

其作用を正せば悪寒發熱も治する様になり分泌の事も腦に於て司ごつて居るから其作用を正せば寢汗も止むのである排泄作用を司ごつて居るから大小便の通じが適度になり、胃腸を支配して居るから消化并に滋養分の吸收も善くなる其他不眠、咳嗽等總て身体各部を同時に治療する事が出来るのである其内でも寢汗、不眠等は最も早く治るものである斯の如く予の學理と療法とに於ては四方八方より包圍攻撃をなし一城を取り一壘を抜くといふ様に段々身体を丈夫にして行くのである故にまた手後れにならぬ内に治療すれば是非とも病氣が降伏せねばならぬ様になつて來るのである但し有形無形の養生法は無論必要である

或人がメンデルズゾーンといふ大醫に肺病の療法を尋ねた所が唯空を嘯て「金錢々々」と答へたさうである其他多くの醫士の説明を見ても兎角第一に金錢の事を述べて居るが實際何程金錢を使つても大概治らないのである最も肝腎な療法が間違つて居るは幾ら金を掛けても夫で病氣が治る譯のもでない予の療法に於ては轉地や滋養物

には左程に重きを置かず初期の人では二週間位で幾らも治つて居るから特に多額の金銭を要するといふ事はない其代り心を安氣に保つ事が必要であるが斯る事は金銭を要しないのである

多くの讀者は予が「本病を治療するに殺菌を目的として諸種の藥劑を投ずるは誤である」と論じたるを見て一驚を喫し且容易に信を置かぬであろうと考へることは諸君が既に微菌説に眩惑して居るからである今試に諸君に問わん「赤痢、虎列刺病、窒扶斯、腺脊髄膜炎、ペスト、猩紅熱、破傷風、狂犬病等の如き傳染病に於て如何なる病氣が殺菌劑に由て確實に治癒せらるるや」と諸君は之に向て何とも返答する事が出来ないであろう現今の醫術に於ては細菌學の研究を唯一の頼みとして純粹培養杯を行つて居るが實際に於ては餘り効を奏しないのである既に述べたる如く肺病に對する諸種の殺菌藥は皆無効であるといふ輿論になつて居るので今日の療法に於て唯一の頼として居る所は空氣療法と食餌療法とに過ぎないのである空氣や食物が如何

して結核菌を滅殺し得るや其理由如何と問わば一言の答もなし得ないであろう本病に對し今日の療法に於ても殺菌の目的を放棄して居る事が明かであれば何も微菌々々といふて騒ぐには當らないのである斯の如き譯であるから予が本病を治療するに殺菌を目的とするは誤であるを論じたのは決して不當の言ではないのである

是より予の發見したる學理と療法とが本病に對して有効なる所以を事實の上に就て説明して行かうと思ふのである

通常患者には肺病といふ事を知せない様にして肋膜炎か氣管支加答兒とか言ふで置く若し直接に肺病だと言へば直に心配して動悸が高くなり其他の症候（咳嗽、發熱等）も急に悪くなるからである元來肺病は何人も非常に恐れて居る所の病で之に罹れば到底助からぬものと思ふて居る故に患者に對してお前は肺病であると告げるのは恰も死刑を宣告したと同じ譯であるから君は肺病であるといふ一言は患者に取ては非常に有害なる刺戟である斯る刺戟の爲に腦髓中の病的作用は益々増大して病

勢を重からしむる事になるのである

又患者の方面に於ても成丈け肺病と言れたくないもので中には肺病と言われて腹を立て歸り道に薬を投棄する者杯もある予も本病に就ては自身に實驗して居るが初めて肺病と言われた時には最早社會に立つ事も出來ず唯死を待つばかりであるかと非常に失望落膽して卒倒でも仕兼まじき感じがした實際何人でも肺病と言れた時は一種不快の感覺と恐懼失望等が伴て來るもので必しも素人ばかりではなく病氣治療を専門として居る醫士でさへ自身が病氣になると矢張り同じ様な感じを生ずるものである實際表にも掲げてある醫士菊田慶徳君の肺病全快談の中にも次の如き一節が述べてあつた

私の知己諸友醫達々毎日私の枕邊を圍んで只管私を慰め咯血は必しも肺結核には限らないから決して力を落すな心丈夫で居れなご、一時の氣休を操返して慰て呉れた今から考へて最も愚かしく思ふ事は滿更の素人でも無かつた私自身が矢張

自分の病氣を肺結核以外の出血にしたがつて居た事である或は咽喉の出血ではないかと思ひ或は氣管の出血ではないかと考へ時には強て胃の出血であつて呉れ、ば善いがなご、實に馬鹿々々しい事まで望をかけて居た若し一寸でも肺結核とかいふ言語の腦中に閃めいた時には忽ち頭上から冷水でも浴せられた心地がして見る々々胸の動悸が高まるといふ程までに肺病といふ事には臆病になつて居たのである云々

肺病患者は氣に入らぬ人が來れば俄に氣分が悪くなり其日は殊更熱も昇り咳も多く且食も進まぬものである之に反し氣に入らぬ人が來て愉快に談話をして居れば病氣の事も打忘れ氣分もよく其日は熱も昇らず食も進み總て身体の工合がよいものである即ち此時は病的作用が輕減して幾分病勢が善くなつて居るのである斯く無形的の刺戟に依り病勢の消長を來すのも天氣模様が病氣に關係するのも其道理に於ては異りはないのである第一章に説明した通り患者に取て有害なる刺戟は腦の病的作用を

肺病全快實歴表

職業姓名	療養事項	精神上の關係	呼吸	治療法	飲食物	房事	運動	土地
加藤病院長 ドクトル 加藤時次郎氏	意思の強固、坐禪、精神の集中、絶えず無用なるものを排除する	深呼吸、吐き出し、静養	一切薬品を却て害あり	肉類、牛乳、魚卵、牛乳、之を食物は好まぬものが多い	自炊をなす、又海岸へ行く	室、時、大、室内、暖		
日本銀行員 米國醫學博士 北島 巨氏	一時神経の爲め重く、心に配せず、迷ひ、病を恐れず、必ず治ると決心す	古喘の稽	肺には薬なし	酒類、牛乳、之を食物は好まぬものが多い	自炊をなす、又海岸へ行く	室、時、大、室内、暖		
東京 關口 梅吉氏	病氣といふ事を忘れる、死なぬと思つて、死に懸けず、安心が必要	深呼吸、詠曲	薬は二三ヶ月にて廢す	酒類、牛乳、之を食物は好まぬものが多い	自炊をなす、又海岸へ行く	室、時、大、室内、暖		
東京養育院醫士 小原隆造氏	身体を丈夫にすれば、程度治るに相違ない、確信す	深呼吸、詠曲	薬は二三ヶ月にて廢す	酒類、牛乳、之を食物は好まぬものが多い	自炊をなす、又海岸へ行く	室、時、大、室内、暖		
横濱市開業醫 山中敏恭氏	過度治すといふ確信が、必要、失望、落胆は無用、危険不安は、我身を殺す、睡眠時間を多くせよ	深呼吸、詠曲	薬は二三ヶ月にて廢す	酒類、牛乳、之を食物は好まぬものが多い	自炊をなす、又海岸へ行く	室、時、大、室内、暖		

備考	東 京 雨宮敬次郎氏	下谷五條天神宮 瀬川 雅亮氏	北海道炭礦會社員 福澤桃介氏	萬朝報記者 曾我部市太氏	陸中瀧衣町 榮濟堂醫院 菊田 慶徳氏
此表は信用ある人々、自身の全快實歴談をなし、之を東京朝日新聞紙上に連載し、又之を書籍として、實業日本社より發行したるもの、中より要點を抜き、採りしのであつて、最も正確なるものである詳細は同社發行「肺病全快談」に就て見るべし	一切世事を捨て、死人同様、心持になる、相場の事、考へて居る、血配は心配せず	精神を落着か、肝要、浮世の事を捨て、神官となる	死に氣になつて、萬事を放つ、一切世事を捨て、氣樂に暮らす、決して死なぬものと思ふ	病氣の事を考へ、心を病氣より抜取れば、治る、信ず、心配を禁じ、樂を作る、心は他へ移す	大より救出されし、見る、自己の病人たるを忘る、悲観は有害、楽天的になる
		腹呼吸			肺病を禁ず、呼吸を伴ふ
	喉血止らず、醫士より命を懸せ、水を浴び、水を浴び	水擦物を冷、水擦物を冷	服薬及注射、射し効なし、目た感、目た感	ある、思ひ、ある、思ひ、ある、思ひ	夢角、肺病、夢角、肺病、夢角、肺病
	肉類、牛乳、鶏卵、何で、口に入れて、食ふ	肉類、牛乳、鶏卵、何で、口に入れて、食ふ	酒、煙草を、飲む	酒、煙草を、飲む	嗜好に、酒、煙草を、飲む
	色を、行坂路を、上下す				淫慾、屋外歩行、大弓、色慾、魚釣、大弓、淫慾、屋外歩行、大弓
					暖む

強めて病を重くし有利なる刺激は之を輕めて健康の方に向わせるのである故に病人を取扱ふには患者の身体ばかりでなく心も共に看護してやらねばならぬのである

第一章中にも述し如く數年前東京に於ては田ウコギ草で肺病が治るといふ評判が非常に高くなつて殆ど總ての新聞紙上に毎日々々此記事を掲げ全快者の姓名を示して實に古今無類の肺病特效薬であるかの様に書立た勿論其時は實際治つた人があつたに相違ないのであるが何故効があつたかといふに當時は非常に評判が劇しかつたので患者は別に取調べもせず之を呑めば屹度治るものと深く心に思ひ込んだから此心の働で脳髓中の病的作用が健康時の作用に轉して治る者があつたのである然し田ウコギ草其物に肺病を治す所の力がある譯ではないから其後評判も永續せず効能も亦ない様になつたのである然れ共是等の事實中に於て肺病治療に關する光明は儘に認める事が出来るのである即ち予の發見したる治療上の原則に由り脳髓中の病的作用を健康時の作用に轉せしむる事を謀れば治癒せらるべきものであることの道理が

分るのである

尙一層明瞭に此理を了解せしめんが爲に信用ある人々が新聞紙上に公にしたる全快實驗談中より其要點を摘出して別表を作つた此表中には醫士も四名まで含まれて居るのであるが何れも心を安氣に保ち病氣の事を心配せず必ず治癒せしむるとの決心を最も必要なる條件となす事に就て一致して居る事が分るのである即ち斯る心の力に依て腦の病的作用を抑壓し漸々健康時の作用に轉せしめて終に全快する事が出来たのである(精神上の關係を記したる欄を熟讀せよ)呼吸及び發聲の欄に於ては深呼吸或は諸種の歌を發唱した者もあり或は談話を禁じたる者或は此事に就ては更に述べざる者もあるが支障なき限りは斯る事も補助となるのである即ち生理的に於ては空氣を多く呼吸して肺の働きを強め心理的に於ては少くも其間丈は病の事を打忘れて居るの益がある加藤ドクトルの肺病談中には頻りに淨瑠璃の効能を賞揚して居るが同氏は非常に淨瑠璃が好きで且上手であり醫者を止めて淨瑠璃語になろう

かと思ふた程であるから之を語れば病氣の事も全く打忘れて頗る愉快を感じるに相違ない斯く心氣を慰め病的觀念を一掃する無形の有利的刺激(精神上の作用)が病氣を平癒せしめた重なる原因となつて居るのである唯生理的のみにみ解釋するは誤である

治療法の欄に於ては概ね藥劑も無効として居ること子の學理と一致するのである其中に於て菊田慶造氏は麥角越幾斯が効ある如く述べて居るがこは一の血止劑にして肺病を治すべき程のものではなく同氏は麥角越幾斯の中毒にて死なんと決心し友醫等の止めも聞かず漸々其量を増加して終に一日二〇、〇の非常なる大量を用ひたと述べて居る併し何等の中毒も起きなかつたのは實に僥倖である故に藥其物の効ではなく命を捨る心になつたから却て善かつたのであらう然も同氏は精神上に就ての必要を十分に述べ且火中より救出されし夢を見てから確かに神は此世に存在して人の生死を司つて居るものと信ずる様になつたと言ひ肺病患者の心得として同氏の示

せし箇條中にも人間以上の或者を信せよいふ事が述べてある故に同氏の全快に就ても精神上の事が重になつて居る事が明である又瀨川雅亮氏は麥角越幾斯、單寧、クレンオノートを用ひたとしてあつて麥角越幾斯の爲には中毒を起し殆んど全身麻痺に陥つたと述べて居る且つ同氏は永年肺が治らず醫士よりも斷然慾心を離れ全く塵外の人となるが此病氣を治すに肝要だと切に忠告されて終に神官となつたといふ事であれば藥の効でない事が分るのである

醫士小原隆造氏はグレンオノート、グアヤコール、クレゾール、キニートル其他種々様々の効能書や廣告に迷ふて用ひて見たが一向効能がない藥によつては却て害をしたのもあると述べて居る斯く醫士でも肺病で困つて來ると賣藥杯まで用ひて見る様になる語り治療上の原則が発見せられて居らないから色々種々なる事を試して見る様になつて來るのである又同氏は天然噴出の蒸氣にて背面より兩肩胛骨間部を温めて効があつたと述べて居るこは蒸氣の當る部分に精神力が集つて腦の病的作用を輕

減し血液の循環をも助け又山中に在て運動し世事を忘るゝ等の事より多少の効能はあるべしと雖も之を以て確たる肺病の治療法となすべき程のものではなからうと考へる

飲食物に就ては無論滋養品は可なれども自身の好む所の品を選り用する事が必要である假令滋養物でも嫌なものは却て害となる事の例は既に述べて置たが之と反對に腦に於て好む所のものは即ち有利なる刺激であるから病的作用を軽減するもので重症の患者が好物を食し夫より食つきて快復する事杯も往々ある或人より聞たる話に窒扶斯に罹りて重症に陥り食も進まぬ様になつた患者があつて主治醫も最早永い事は無いといふ程であつたが其時患者は頻りに蟹が食べたいと請求した折柄夏の事ではあり醫士は宜しくないと言ひたれど到底命のないものなれば望みに任せるが善からうといふ事になつて終に蟹を興へたるに一時に三匹も食し大層美味かつたといふて非常に喜んだが之より食つて終に全快したといふ事である

藥劑に就ても同じ傾があつて醫海時報に掲げてあつた記事に某醫士が胃加答兒の患者に稀鹽酸一、〇規那丁幾二、〇單合六、〇水一〇〇、〇の水藥を興へしに患者は服後俄に大熱を發し苦悶堪へ難き程の容躰となつて醫士も不審に思つたが患者の言ふに若し此藥、稀鹽酸と規那丁幾にてはなかりしか果して夫なれば曾て岩佐病院にて同劑を服したる時も同じ様な苦をした事があつたと此醫士は尙翌日も同劑を興へて見たが矢張前日同様であつたといふ事がある稀鹽酸や規那丁幾は尋常藥であつて中毒的症候を起すものではないが腦作用との關係で斯る事が起て來るのである但し心に其事を意識した時ばかりに限つた譯ではなく意識せざる時にも起すものである

房事は多くの人々も戒めて居る通り無論有害である成べくは夫婦別居して療養する方がよい轉地先で病氣が輕快した時に妻君が見舞に來て夫が爲め病氣が再び悪くなり終に妻君が骨を携へて歸る様な事も往々ある、運動は其人の身体に應じ疲勞を

來さるる程度に於て行ふ事は必要である轉地は善良なる空氣を呼吸する點もふるが廣々とした景色もよい所へ來て自然心を慰め病の事や室事の煩しき事杯を忘れ心が安穩になるのも療養上有利なるのである然し適當なる家屋に在て安氣に療養が出來れば必しも轉地の必要はないのである近來寒氣の事は敢て關係がないと稱ふる人もあるがこは空氣療法に偏したる謬説で自身に肺病の經驗がないからである既に表中に掲げた一二の人も適度に室内を暖むべき事を述て居る予の經驗に依るも寒氣は適當の方法を以て之を防ぐの必要を慥に認て居る

右にて實際表の説明を終つたのであるが僅に此表次に就て考ふるも腦髓を基礎として治療すべきものであるといふ予の發見したる治療上の原則が本病に對しても亦最も有効にして他には適當な治療法がないといふ事の理由が能く了解せらるゝであろうと考へる尙或る雜誌より採率して一例を擧げ然る後予の治療したる治驗の實例を示そうと思ふ

雜誌「婦人世界」に野村トシ子といふ人の肺病全治實驗談が載てあつた今其要點を次に掲ぐ之を讀まば本病と腦作用との關係が如何に大なるものであるかを知る事が出來ようと思ふ

此婦人は十八歳の時秋の初頃から何となく氣分が悪く少し咳嗽もあり夜は寢汗も出たが平常身体が丈夫な方であつたから風を引たのだらうと思て居たが咳も止らず段々身体が瘦て來る様だから醫士に見て貰つた所か咽喉と肋膜炎と少し故障があると言つた其翌日母と共に親類の家へ往た所が其家の娘が肺病で二三日前に轉地したとの話で其容軀を見て見ると自分のと少しも違わないので非常に驚き最早其家に遊で居る事も出來なくなり暇乞もソク々々にして自宅へ戻つたが其晩は大熱が出て夜通し氷で冷し襟に眠りもせず翌朝は全身が綿の様に疲れた是は話を聞て心配した爲に俄に病氣を重くしたのである又早速醫士を迎へて診察して貰つたが矢張り咽喉と肋膜炎の悪いのだと言ふ然し昨日聞いた娘の話が氣になつて醫士は

氣休めを言ふて居るのではあるまいか若しや肺病に罹つて居るのではあるまいかと思ふと氣がワクワクしてたまらない眞に肺病であつたらドーしよう助かるであらうか助からぬであらうか大抵は助かるまい死だらドーしよう杯と考へて終に泣出した

斯様に心配した爲に病氣は益々悪くなり胸に痛を覺へ血が出る時には胸が裂ける様に苦しくなつた烈しい咳の出た時痰を鼻紙に受て見たら血の塊であつた依て名高い佐々木博士の治療を受ける事になつたが夫から後は兄弟や女中杯も一切室内へ來ない様になつたので愈々肺病といふ事に極つたものと思ひ益々容体が悪くなりコップに一杯位一日に二三度も咯血し夜は寢衣を二三枚も着換へる程に寢汗も多くなつて來た終に博士の勸で母と共に鎌倉へ轉地する事になつた今迄は肺病といふ事を秘して置たが隠し切れぬ様になつて終に之を打明けた本人も兼々肺病は氣を軽く持たねばならぬといふ事を聞て居たので成べく自身で氣を引立る様に

して居たが丁度其頃肺病の自然療法といふ事が新聞紙上に出て居るのを見た其大要は肺病は必ず治るべきものである肺病は治らぬものと極てしまふから治らないので必ず治ると思つて運を天に任せ自然に従つて療養すれば屹度治る、肺病の薬は未だ發見されて居ない故に薬は飲まなくても差支へない、滋養物だからとて無暗に食へては却て害となる何でも好きな物を適度に食へるが一番よい、新鮮なる空氣を吸ひ日光に當り唱歌でも歌つて病氣の事を忘れる様にするがよい、適度の運動を規則正しく行ひ常に心を愉快にして自分の病氣は屹度治ると確信して居り自分の行て居る治療法は最も完全なものと思ひ決して迷ふてはならぬ等の事であつた

婦人は此記事を見てから心機を一轉して薬も牛乳も止めてしまひ毎朝早く海岸へ出て二十分間程深呼吸をして其邊を散歩し家に歸りて朝食を喫する様にしたが非常に食が美味しく食へられ食後は日光の當る所で小兒等を集めて唱歌を教へたり或は体操をしたり或は小兒等を伴れて景色の好い所を散歩したり終には魚釣に

まで行く様になり又謠を習ひ始めて熱心に稽古をした斯の如き事をして居る事半年餘りで肺病も全快し元の様な体格となり其後二十歳の時に縁付て今では小兒が二人までもあるといふ事である

右に述べたる實歴表の人々并に此婦人の實例に依るも意思を強くし病的觀念を一掃し病に打勝つ所の心を盛ならしむれば治癒せしめ得る事が明である即ち自身の力丈で腦の病的作用を健康時の作用に轉じて行くので語りは予の發見したる學理及び療法と同じ事に歸するのであるが何人にも斯る意思の強固を望む事は出來ない假令へ教へて遣つても實行する丈の勇氣がない上に示したる例の如きは千百人中の一人である又假令へ治るにしても唯自身の力丈にては多くの時日を要する上記の例にては一年近くから中には七八年の歳月を経過して始めて治つた者もある瀬川雅亮氏の如きは現今でも時に咯血する事があると述べて居る尙又自發的即ち自身の力丈にては唯漠然と大体の上で腦の働を善い方へ向けて行くので細部即ち咳嗽、不眠、寢汗、

食慾、發熱、便通等を適切に治療して行く事は出來ない然のみならず最も重要部分たる腦髓及び肺臟、心臟の作用を直に治療する事も出來ない概して言へば意思を強固にして居て殆ど自然に治つて來るのを待つて居る様な譯である故に上に示したる人々の採用せし方法も確たる肺病の治療法となすべき程のものではなく寧ろ患者の心得若くは攝生法として適當であらうと考へる

予の療法に於ては前に屢々説明せし如く腦髓を基礎とし心理と生理との方法を調和して治療するのであるから病氣を案じたり或は之を恐るゝ様な事から肺臟心臟の作用、咳嗽、不眠、寢汗、發熱等の如き有形無形の事項を適切且同時に治療する事が出來るので然も身体には些の害を興ふる事なく否全身何れの部分をも善良ならしめるのである故に治療法として實に萬全の策である從來の療法に於ては健康体に對してさへ有害なる劇毒藥を殊更病体に向て用ゆるのであれば大体の上より論じて自然の道理に戻つて居るのである又予の療法に於ては自發的と他發的との手段方法を

も調和して行くのであつて自發的とは次に示すが如き患者の心得（有形無形の攝生法）をいひ他發的とは予の行ふ所の施術をいふのである斯の如く各方面の調和を謀つて治療するのであるから其効驗は實に顯著にして短少の時日を以て治癒せしむる事が出来るのであるそれは治験の實例に就て見られよ但し如何なる名法と雖も手後れになつた者は治癒せしむる事が出来ないのである

茲に患者の守るべき心得の大意を示せば

第一 肺病は治らぬものと思ふは大間違で現に全快した者は澤山あり此療法に依れば必ず治るべき筈になつて居るから決して心配せず又色々人の言ふ事に迷わず全く一任して治療を受くべし心配煩悶は自殺を意味す

第二 常に心を快潤に保ち病氣の事は一切思はず必ず治るものと確信し決して不安の心を起すべからず意思は十分強固なるを要す

第三 一切世事を放棄し何事にも放任主義を取り恰も仙人となりたる心得にて

常に精神を安穩に保つべし

第四 滋養食物は必要なるも度に過ては害となる何でも好む所の品を口に適する如く調理し且時々品物を變更し常に美味を感じる様にすべし

第五 酒、煙草は禁すべし但し精神の興奮を求むる爲め盃に一杯位の酒を用ゆるは妨げなし

第六 身軀の疲勞せざる程度に於て毎日規則正しく運動するを要す例へば大弓釣魚、体操、歩行、室内の掃除、植木の手入れ、小鳥の世話等色々事柄を變更して行ひ徒らに手を束ねて居らぬ様にすべし

第七 唱歌、淨瑠璃、謠、端唄等好む所のものを練習すべし但し咳嗽に障る場合には聲を出さずとも可なり肺の働きを強め且つ心を慰めて病氣の事を忘るゝ故大によし

又陽氣なる音楽もよろし

第八 時々深呼吸を行ふべし此時は無念無想となり吸氣の際腹を膨らせ鼻より呼吸す之を腹呼吸といふ仰臥して行へば最も工合よく出来る又不眠の場合にも之を應用すれば眠りに就き易し

第九 房事は嚴に之を禁すべし

第十 寒き時は適度に室内を暖の風を引かね様にすべし又冷水摩擦を行ふべし但し入浴は成べく見合せ且其時間を短くすべし

第十一 成べく晴やがにして空氣の流通も善く且日光の當る室を撰みて居るべし

第十二 嫌な人には而せず好きな人を近づけ面白き話を聞く様にすべし

第十三 睡眠時間を長くし八時間より少なるべからず夜は早く寢に就き朝は日出頃に床を離るべし

第十四 常に胸を張り顔を仰向け居るべし俯向きたる姿勢は精神を陰鬱ならしめ

且肺部を狭むるゆへよろしからず

第十五 讀物は滑稽なる者例へば膝栗毛、バツク、滑稽新聞の類にして心を陽氣にし笑を催ふすものを良しと總て無意味の大笑は健康に益あり

小説又は普通の新聞紙等は讀まざる方可なり
患者の心得に就て特に注意して置く事がある是は實際に目撃した事であるが「治りたい」「生て居りたい」「死にたくない」等の心を起してはならぬ此心は歎願的の意味を含み既に七八分通り病に負て居り自ら全快を危んだ薄弱の精神であるから常に病の事を心配して居る斯る心で居る人は多く恢復しないものである之に反して「屹度治る」「必ず治す」「是非治る筈である」「必ず死なぬ」等の如き病に打勝つ所の確乎たる精神を持って居らねばならぬ此心に病を壓倒する強制的の意を含で居るから病の事も苦にせず常に心は平氣である斯様な心で居る人は必ず全快する事が出来るのである右に述たる所は文字の上では僅かな違ひの様であるが實際に於ては生死の區別

が定まる程の肝要な事柄である故に能く此事を心得て置かねばならぬ尙一步進で死生は天命であると悟を開て平氣で居るか或は死だ氣になつて萬事に無頓着となつて居るのも善いのである

次に予の治療したる二三の實例を掲げて参考に供する事にする

第一 治 験

三重縣安濃郡明合村小學校長紀平登治二十八は其妹が氣分寒き時々血の出る事ありしを肺病に罹りたるものと速断して非常に傳染の事を心配し食器は申すに及ばず衣類寢具其他何品もなく毎日々々消毒法を行ひ居りしも尙傳染の事が心に懸りて安眠も出來ず日夜心を痛めつゝありしが終に自身も血の出る様になり氣分は益々悪く悪寒發熱等も加わり愈々容易ならざる容体となつて來た元來妹の病氣は輕症のヒステリーであつたので其後間もなく全快したが校長の病氣は一向恢復しない依て近傍の醫士に診察を受けしに肺病になるかもしれないと言われたので早速名醫の診察を受

んため京都へ赴き某病院で見ても貰ひしに肺病であるとの事暫らく治療を受けて居たが更に効がなく遂に予の所へ來たのは明治三十八年十月であつた之を診するに身体衰弱して貧血を呈し精神幽鬱、咳嗽咯痰あり寢汗多く時々發熱して三十九度にも昇りたる事ありといひ右肺部第三肋骨の位置に於て明に水泡音が聞へ純然たる肺病患者であつた

依て本病に關する予の學説を述べ必ず治療すべきものである事の理由を説明し引續き十四日間治療したるに氣力頗る旺盛となり惡寒、發熱、寢汗、咳嗽も止み水泡音も殆んど聞へない位になつて歸國せしが同年十一月十三日附を以て其後身体各部益々良好となり誠に喜び居るとの鄭重な禮狀を贈て來た

第二 治 験

岐阜縣惠那郡遠山村春日井圓之助(四十二)は二ヶ年前より肺病に罹り氣分寒き夜間は特に咳嗽多くして屢々睡眠を妨げられ時に惡寒、發熱する事あり又胸部に疼痛

を感じ是迄所々にて治療を受けしも到底全治の見込がないと言われ自身も斯く思ひ居りしが明治四十年四月に予の所へ来て治療を受ける事となつた依て肺病に關する予の學説を説明し引續き十三回の治療を行ひしに氣分も爽快となり咳嗽も治し唯胸部の疼痛のみ僅に残り居りしも本人は最早全快疑ひなしと確信し萬一病勢不良となりたる節は再度來りて治療を受くべしとて歸國せしが其後も身体益々健康に向へりと言へり

第三 治 験

飛騨國益田郡竹原村熊田幸八(四十)は四ヶ年前より氣分寒き物事が苦になり常に死にたい様な心地がして世の中が厭になり上せ頭痛等もあり屢々咯血した事もあつて所々の治療を受けしも更に効なく此度愛知病院にて診察を受けしに肺病であるとの事で其後に至り予の所へ來たのは明治四十年八月であつた予は之を診察し斯る輕症は僅々の日數にて治癒するものであると答へ一週間毎日二回宛の治療にて全快し

歸國後同年九月廿四日附を以て御蔭で一命を拾ひ實に夢かと許り喜び居る旨の禮狀を贈つて來た

第四 治 験

予の町内に住する柴田利三郎(二十五)は半ヶ年前より不眠の傾ありて夜間時々發熱し胸部に微痛あり近邊の鈴木某といふ醫士にかゝりしに初期肺病なりとの事にて暫らく服藥し居りしも更に効なく兼て肺病には藥がないと聞て居たので明治三十九年一月予の治療を受に來た依て肺病の事を説明し六日間治療したが夫にて殆ど全快した此人は教育のある人で予の學理を能く了解したから殊更速に全快したのであると考へる

其他治験の實例は數多あるが何れも大同小異なれば之を省く事にする而て是等の患者は皆從來の治療法を受けて更に効なく最後に予の所へ來た者のみであるが然も尙手後れになつて居らぬ者は左程多くの日數を要せず又別に多額の金錢を費す事も

なくして容易に全快する事が出来るのである既に説明せし如く従來の療法は其根本を誤つて居り假令へ何程の金錢を費すも到底治癒の見込なき事明かなるものなれば予の發見したる學理と療法とが一般に普及して早く世人が有効無害の治療を受ける事になつたならば廣く世の難病者を救済する事が出来る様になつて社會に與ふる貢獻は決して少くないと思ふのである是れ予が世界人類の爲め多年寢食を忘れて研究したる學理を發表した所以である

既に本章中に於て肺病を治療するに結核菌の滅殺を目的とするは誤りであるといふ事を論じて置たが尙茲にツベルクリンの注射に關する予の意見を述べて讀者の注意を促がす事にする

ツベルクリンは結核菌が死滅した時に生ずる所の毒液で手短かに例へて言へば結核菌の腐敗的に傾ひた様なものである故にツベルクリンを注射するのは即ち死滅した結核菌を注射する事に當つて來るのである故に人体の爲になりそうなる等は

ないのである而して死滅した結核菌を動物に注射する時には此動物は瘦せ衰へて死亡し且死滅菌の散在して居る部分には眞正の結核に似たる小結節を生じて居り大量に注射する時には化膿するものである

コッホ氏のツベルクリンは虞里説林を以て結核菌の純粹培養より越幾斯を浸出して作つた毒液である商家に販賣せるツベルクリンの一乃至二密瓦を水溶液にして肺結核患者の皮下に注射する時は翌日若くは翌々日に至り三十九度乃至四十四度に熱度が昇つて來る之を反應と稱へて居るのである然のみならず結核菌の最近周擁には激しき炎症を起し囉音や咯痰も増加して來る

多くの醫書にもツベルクリンが治療上に効があるや否やは未だ審らかならずと記してある又此注射に反對する醫士も随分多いのである予は少しも効がないのみならず却て害があるを論ずるのである何となれば注射した爲に甚しく熱度が昇り激しき炎症を起し囉音や咯痰も増加して其症候を重くするからである

現今は治療の目的でツベルクリンを注射する醫士は大分減少したが尙肺結核であるや否やを認識するに比較的の信憑すべき診断補助法であると稱へて注射を試みる者が往々ある假令へ慥かに肺結核であると明かに診断が付たとしても本章中に論せし如く今日の醫術に於ては本病を治療するの確たる手段がないのである然らば診断丈が明かになつても更に益する所はないのである況んや此診断的注射の爲に病勢を重くするのであるから患者に取りては實に大なる不利益と謂わねばならぬのである

然るに一般社會の人々は治療上の事を皆無知らず居るゆへ他動物と同様に己れの身体を試験の材料に供せられ往々自身に害毒を受けて居りながら今日に至るまで世界に於て治療上の誤りに氣の付た者が一人も無いとは實に歎わしき次第にして是れ予が誠心誠意を以て廣く世の病苦を救わんが爲に此小冊子を著して眞理の存する所を述べ世界に向て大に絶叫する所以である故に讀者に於ても亦誠心誠

意を以て本書を熟讀し能く眞意の在る所を會得して心身の健全を謀られんことを望む蓋し健康は幸福を産むの母なればなり

本書は漸次改訂増補して愈々益々社會に貢献する積りであるが今や巻を終るに臨み一言を述べて讀者に警告すること左の如し

今日の醫術では未だ治療上の眞理が分つて居らず概ね尙試験中である而して多くの内科書を見るに病の症候、経過及び解剖的變化杯は随分精密に記してあるが治療の手段方法に就ては殆んど零である

エスヘル諸病新療法 終

明治四十一年十月十日印刷
明治四十一年十月十日發行

エスハル諸病新療法
〔正價 金五拾錢〕*

著者 赤鹽精

發行者 岩崎鐵次郎
東京市神田區錦町廿一番地

印刷者 木村榮吉
東京市京橋區采女町十番地

印刷所 英文社
東京市京橋區采女町九番地



發兌元

東京市神田區錦町廿一番地
電話本局三〇六七番
振替貯金口座番號四五二七

大學館

心理學催眠學大家竹內楠三先生著 (三十版)

學理應用 催眠術自在

價 三十五錢
郵稅 四錢

各國催眠術○耶蘇奇跡○催眠術○動物磁氣發見○グリムスの電氣生物學狀態○催眠術實例及方法○自己催眠○凝視催眠○催眠鏡○音響催眠○魔術太鼓○觸感催眠○スマル派催眠術○トル催眠帶○筋肉運動催眠○覺醒法○催眠と想像○外感剌戟○一言にて覺醒及治病○信號覺醒○三日間不醒○昏睡狀態○催眠された人○身體と催眠○年齢に催眠○男女と催眠○不承諾者催眠○催眠必要精神條件○偶然催眠○催眠狀態の階級と徵候○感應性昂進○筋肉影響作用○讀心術の心現的説明○人に知さず物を取る○確信と身體變化○被術者自由にさる○捕心術○全身不隨及其原因○強直狀態全身棒の如し○有を無と確信○眞暗中歩行○壁を通し物を識別○思想傳達○天眼通○感覺移轉○感覺過敏○食慾缺乏醫治○十四日斷食して滿腹飢餓を醫す○色情發生○疼痛減少○針を刺し疼痛不感○色情變性○不隨意影響腸の運動○八分間呼吸停止○發汗○精液淚液發射○乳液尿水分泌○脈搏○身體組織○月經變化○皮膚火傷○出血○記憶と催眠○二重意識○催眠中の心と覺後の心○療法としての催眠術○暗示療法原則催眠術三則○催眠術の治療を得る疾病○神經衰弱催眠治療トスアリ精神病○解剖的疾痛○犯罪せしむ○カステラン催眠姦淫○催眠財產橫領○催眠術と犯罪自由○秘密を語らしむ○其他奇現象數百項

60
231



60
231

058660-000-9

60-231

諸病新療法(エスベル) 一名, 治療之真理

赤塩 精/著

M41

CBC-0185



